様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：１１３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０１９８１

研究課題名（和文）リクール正義論の意義と射程および、現代正義論に対する寄与の可能性の研究

研究課題名（英文）On significance of Paul Ricoeur's justice theory

研究代表者
川崎　惣一（KAWASAKI, Soichi）

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：３０３６４９８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：リクール正義論を研究することで明らかにしたのは、それが「私たちはいかに生きることを望むか」「善い生き方とは何か」に関する彼自身の倫理学的ないし人間学的洞察に裏打ちされていることである。その基本的なモデルは、熟慮しつつ決断し行動する人間（「能力ある人間homme capable」）が、「正しい制度において、他人とともに、また他人のために『善い生き方』をめざすこと」という「倫理的目標」を抱きつつ、対話・討議を重ねていく、というものである。

研究成果の概要（英文）：The most original feature of Ricoeur's justice theory is as follows; his theory is based on his ethical and anthropological insight concerning what kind of life we want to live and what a good life is. Its basic model is that human being who deliberates, decides and acts ("capable human being") continues its discourse and dialogue with others, holding its ethical intention; "aiming at a good life lived with and for others in just institutions".

研究分野：哲学

キーワード：正義　リクール

１．研究開始当初の背景

ジョン・ロールズの『正義論』（1971）以降、政治哲学や法哲学、倫理学などの分野で、正義の概念をめぐって活発な議論が行われており、現在に至るまで、その研究の蓄積は膨大なものになっている。

ところで、正義論をめぐる研究動向を見ると、我が国において現代の主要な研究者として紹介されるのは英語圏で活動している人たちがほとんどであり、ヨーロッパ大陸の哲学者や政治学者、倫理学者の名前が出てくることはあまりない。まして、フランスで正義の概念をめぐってどのような議論が行われているのかについては、デリダのものを除けばほとんど情報がないというのが実情である。とはいえ言うまでもなく、ヨーロッパ大陸でも、正義の概念に関して、あるいはまた、正義にかなった社会のあり方について、さまざまな分野で多様な議論の蓄積がなされてきた。

そして現代フランスの哲学者であるポール・リクールもまた、独自の正義概念を提示している。リクールはヨーロッパの伝統的な哲学スタイルを継承しつつ、同時に英米の哲学の動向にも目配りを怠らずに、ロールズをはじめとした現代の正義論の成果を踏まえながら議論を展開している。

リクールの正義論に関する研究は、リクール哲学の集大成という内在的な観点から重要であるが、単なるリクール哲学研究を超えた意義を持ちうるかどうか、さらに正義をめぐる英米での研究の蓄積に対してどのような貢献をなしうるかという観点からも、じっくりと取り組む価値のあるものと考えられる。

２．研究の目的

本研究は、リクール正義論の意義と射程を明らかにすること、またそのことを通して、「正義とは何か」という原理的な問いに対して新たな視点および切り口を提示することを目的とする。

そのために、リクール哲学に内在的な観点から彼の正義論の意義と射程を明らかにすることに加え、ロールズ正義論をはじめとする現代正義論の主流をなす英米圏での正義論との比較対照を通じて、リクール正義論のオリジナリティを明らかにし、現代正義論に寄与することを目指す。

３．研究の方法

本研究は、「リクール哲学おける正義概念の位置づけの明確化」、「リクール正義論とロールズ正義論との対照による、リクール独自の論点の意義づけ」、「リクール正義論の現代正義論における位置づけおよびそのオリジナリティの明示」という３つのテーマを設定し、これに沿った仕方で、全体の研究計画を達成することを目指す。

研究は基本的に文献の収集およびその読解・解釈の作業によって進められる。国内において入手困難な文献については、パリの Fonds Ricœur を訪問して収集を行う。

４．研究成果

本研究の成果として、以下、３つのポイントにまとめて整理しておく。

(1) リクールが正義の概念についてどのような構想を抱いていたかについて。

リクール正義論においては、正義の問題が論じられる際に、人間にそなわる正義にかなった行動をとる能力にアクセントが置かれている。その能力には、単に具体的な行動をとる能力だけではなく、行動する前に熟慮し、決断し、さらに自らの行った行動に対して責任を引き受ける能力が含まれている。

この点がもっとも明らかになるのは、リクール独自の「赦し」の概念を検討することによってである。すなわち「赦し」の概念は、彼の正義論の柱をなす概念の一つである。とりわけフランス思想の文脈では、ジャンケレヴィッチおよびデリダに代表される少なくない論者が「赦し」の問題、とりわけ「赦しの不可能性」の問題について活発に論じられてきたという経緯があり、これらの議論の蓄積を無視するわけにはいかない。またリクール自身も、『記憶、歴史、忘却』（2001）の結論部で「赦し」について詳細に論じるなかで、それらの議論に触れている。また、リクール自身は自らの「赦し」概念を練り上げていくなかで、ハンナ・アーレントが『人間の条件』で展開した「赦し」論を詳細に検討し、これに批判を加えている。

リクールの「赦し」概念のポイントは、人間にそなわる能力を重視し、不正を行った者に対しては、行為と行為者を切り離して行為のみを断罪することで、その者が行為者として社会のなかで新たな行為を行う能力を保持しつけようとしている点である。リクールの見立てでは、アーレントは赦しを、リクールのように行為と行為者との間にではなく、行為とその結果との間に位置づけたために、行為者と行為とが十分に区別されておらず、社会のなかで市民として再び行為を始めるという行為者の能力が謎めいたものとして残り続けてしまった。

以上のように、行為と行為者との区別を明確なものとし、行為する能力をそなえた人間、というリクール独自の人間学の理論構成にのっとった仕方で、「赦し」の概念が説明されている。

また、リクールが、不正を行った側だけではなく、不正を被った側にも目配りを怠らず、不正によって引き起こされた傷やトラウマ苦しむ人間がそれをいかに引き受け、生き続けていくことができるのかについて論じていることも見逃せない。「赦し」は不正を行った人間に対するものであるのみならず、不正を被った側にもまた、無視できない大きな

影響を及ぼすのである。
　以上のような、「赦し」をめぐるリクールの議論は、正義の問題を「よい生き方とは何か」という彼の哲学に固有の問題構成に引き寄せる仕方で論じようとする姿勢を明確にしてくれる。そして、「赦し」の概念がリクール哲学においてかくも重要な位置づけを得ることになった背景として、最初期の著作『意志的なものと非意志的なもの』以来晩年に至るまで、リクール哲学全体にわたって「悪」の問題がきわめて根本的なモチーフをなしているということがあり、この点を踏まえて、リクール哲学全体を貫く「希望」の論理についてもまた、理解する道筋が開かれるのである。

(2) 以上から理解されるように、リクール正義論は、彼自身の倫理学の構想の延長線上にあり、その意味でリクール哲学の一つの到達点と見なすことができる。それは、「私たちはいかに生きることを望むか」「善い生き方とは何か」という倫理学的ないし人間学的洞察に裏打ちされている。これに対して現代正義論は、ロールズ正義論が典型的にそうであるように、個人が具体的な場面でいかに振る舞うべきかといった規範意識を問うというよりも、社会全体をよりよいものに改めていく際の原理を問うという問題意識に貫かれている。現代正義論の全般的な方向性のなかでは、原則として、善悪や価値の問題が問われるような、個別的な生における具体的な場面が主題的に扱われることはあまり多くない。
　このように、両者の議論はそもそもの出発点が異なるため、参照している哲学史的な知見が重なるにもかかわらず、両者を単に対照させるだけでは、議論がうまくかみ合わないという事態が生じる。そこで、リクール正義論の意義について、広く正義論一般のなかで明確にしようとするためには、論点を絞り、両者を共通の土台の上で接続してやらなければならない。
　こうした点においてもっとも見込みがありそうな共通の土台として、近年とりわけ法哲学や倫理学の分野で活発に議論されている「グローバルな正義」をめぐる諸問題がある。では、リクール倫理学は、「グローバルな正義」をめぐる諸問題に対してどのような意義をもちうるのだろうか。
　端的にいえばそれは、「人権」の概念に対する哲学的な根拠づけをリクールが試みている、という点にある。「グローバルな正義」というのは、貧困を含めた深刻な経済的諸問題にさらされた人々に救いの手を差し伸べる義務はあるのか、という問いかけを出発している。これに対してリクール正義論の枠組みでは、彼自身が『他者のような自己自身』（1990）のなかで「倫理的目標」と呼んだ、「正しい制度において、他人とともに、また他人のために『善い生き方』をめざすこと」という定式から出発しつつ、正義にかなった社会の構想を示そうとしている。そして、この「倫理的目標」が「自己評価・心づかい・正義感」という３つの段階を経るものとして描き出され、さらに『構成の探求２』（2001）で、「正義の始原的観念は、善く生きたいという願望が対話的・共同体的・制度的な尺度で展開したものにほかならない」と述べられるに至っている。そしてリクール正義論の枠組みにおいては、こうした正義のもとで、「評価と尊敬に値する主体」という仕方で、「権利の主体」が構想されている。かくして、人間は「権利の主体」として、正義にかなった社会のなかで「よい生き方」を目指すのがふさわしいのであり、また人間はそのようなものとして理解されなければならないという、リクール独自の人間学の構想のなかに、正義が位置付けられることにもなるのである。

(3) これまでたびたび指摘してきた点、すなわち、リクール正義論が、彼独自の人間学の構想のなかに位置づけられ、さらに言えば、その構想から基本的な発想を汲んでいるということ、このことが最終的には、彼の正義論の最大の特徴であり、またその点にこそ、正義論全般に対するリクール倫理学の最大の意義がある、と評価することができる。
　リクールの人間学は、人間を「行為し受苦する人間」として捉え、葛藤や対立にさらされながらも、自らの行為について熟慮し、決断し、責任を引き受ける、そのような能力を備えた「能力ある人間（homme capable）」という概念をその土台としている。
　そして、彼が自らの正義論を構築していくにあたっては、その議論構成はつねに、「私たちはいかに生きることを望むか」「善い生き方とは何か」という彼自身の倫理学的ないし人間学的洞察に裏打ちされていることにもなっており、その基本的なモデルとは、彼自身が設定した「正しい制度において、他人とともに、また他人のために『善い生き方』をめざすこと」という「倫理的目標」に向かって対話・討議を重ねていく、というものである。
　ここまで見てきたようなリクールの正義論さらには彼独自の人間学および倫理学理論構成は、彼の哲学がそのすべてにわたってそう見えるかもしれないように、一見オーソドックスである。奇抜な思考実験などを行うこともなく、切れ味の鋭い考察を展開することもない。しかし、彼の正義論は、具体的な葛藤や衝突の場面を念頭に、錯綜した論点を解きほぐしながら、問題の解決に向かう道筋を粘り強く模索し、示そうとする具体性と堅実さを備えており、理論的な精緻さを競う方向に傾きがちな現代のもろもろの正義論と比較して、固有の意義と豊かさ、射程の広さを備えていると評価することができるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
① 川﨑惣一、リクール倫理学はグローバルな正義について何を言うことができるか、フランス哲学・思想研究、査読有、第 22 号、2017、136-147.

② 川﨑惣一、リクールにおける人間と悪、宮城教育大学紀要、査読無、2017、34-46.

③ 川﨑惣一、リクールとアーレント――アーレントとリクールの「赦し」論をめぐって――、東北哲学会年報、査読有、第 29 号、2015、1-17.

〔学会発表〕（計１件）
① 川﨑惣一、リクール倫理学はグローバルな正義について何を言うことができるか、日仏哲学会、2016 年 9 月 10 日、学習院大学（東京都）.

〔図書〕（計１件）
① 川﨑惣一、リクールとマルクス　リクールはマルクスをどう読んだか、法政大学出版局、鹿島徹・越門勝彦・川口茂雄編、リクール読本、2016、252-261.

６．研究組織
(1)研究代表者
川崎 惣一（KAWASAKI Soichi）
宮城教育大学・教育学部・教授
研究者番号：30364988